



## 港湾の功労者

フリーライター

**小沢 信行** (おざわ のぶゆき)

1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。

功績を残した先駆者に対し、敬愛の念を込め「…の親」とか「…の父」という呼び方をします。小樽港建設の指揮を執った広井勇は小樽港の「生みの親」、引き継いだ伊藤長右衛門は「育ての親」といわれます。釧路に漁港を造成した嵯峨久は「釧路漁業の父」、留萌港建設に尽力した五十嵐億太郎は「留萌港開発の父」として尊敬されてきました。

### 広井勇、伊藤長右衛門 民間主導で移転

札幌農学校（現北海道大学）を卒業した広井勇は自費で米国に留学し、働きながら橋梁、土木工学を学びました。1897年小樽築港事務所長となり、日本初のコンクリート製外洋防波堤となる北防波堤を建設します。1899年には東京帝国大学（現東京大学）教授に就任、その下で学んだのが伊藤長右衛門でした。

伊藤は広井の勧めで北海道庁に就職。1909年小樽築港事務所長となり、世界初のケーソン進水方式を採用し南防波堤を完成させました。

「港湾工学の父」とも称された広井が亡くなったのは1928年10月。間もなく、学者仲間や教え子らが故広井工学博士記念事業会を結成、伝記の発行と広井が手掛けていた英和工学辞典の編さん、そして生前から懸案だった銅像建設を決めます。

三つの記念事業の中で真っ先に実現したのが胸像です。東京美術学校（現東京芸術大学）教授、水谷鉄也が制作し、1929年10月12日には小樽港を見渡す小樽公園で除幕式が行われました。この事業には伊藤も特別委員として参加、式典では代表者として玉ぐしを供えました。

その伊藤が死去したのは10年後の1939年8月。1940年6月には、北海道庁の関係者らが故伊藤長右衛門氏記念会を結成し銅像建設を目指します。胸像は東京在住の田嶋碩朗が制作し1941年7月20日、広井と同じ小樽公園で除幕式が実施されました。

しかし、それから2年後の1943年、戦時中の金属回収令により、広井と伊藤の像は台座を残して撤去されます。



小樽港生みの親、広井勇の胸像

戦後、銅像を再建したのは小樽市です。同市出身で東京在住の中野五一に2体の制作を依頼し、昔と同じ台座に復元しました。除幕式が行われたのは、供出から10年後の1953年11月3日でした。

以後、2人の像はこの地に永住するはずでしたが、1990年代後半になり移転論が浮上します。提唱したのは近藤工業社長、土栄静雄でした。胸像が鳥のふんで汚れているのに驚き、1993年から会社ぐるみで清掃奉仕を始めたのがきっかけでした。

何度も訪れるうちに「2人の功績を次の世代に語り継ぐには、もっと人の集まる適当な場所に胸像を移設させるべきだ」と考えるようになります。

1996年からは行動を起こし、市に要請したり、業界誌に投稿したりします。さらには自費でパンフレットをつくり移設を訴えました。

一方、1997年から1998年にかけて、小樽開発建設部が小樽築港100周年記念事業を展開。1997年には札幌テレビ放送（STV）が広井の業績を紹介するドキュメント番組を放映し、市民の関心が高まります。

こうした中、かつて小樽運河の保存運動に携わった石井印刷社長、石井伸和が、北海道中小企業家同友会小樽支部事務局長、伊藤浩と胸像移転の組織づくりに動きだします。1999年2月、土栄らも加わり準備委員会が発足し、同年5月には「廣井勇・伊藤長右衛門両先生胸像帰還実行委員会」の設立にこぎつけます。

会の名称には、2人の功績の証しである港に、公園



小樽港育ての親、伊藤長右衛門の胸像

から像を「帰還させる」という意味を込めました。実行委員長には小樽商工会議所副会頭の竹内恒之が就任、石井は事務局長を務めます。

総事業費は1,500万円。市から270万円の補助金を得たほか、近藤工業が創立50周年を記念し1千万円を寄付したことで、資金調達のめどが一気につきました。

移転場所は運河の北端にある運河公園。2人の胸像はいずれも港の方を向いており、広井の後方で伊藤が師を見守るという位置関係になっています。

胸像帰還は市の小樽港開港100周年記念事業の一環となり、除幕式は1999年8月4日に実施、広井像、伊藤像の順に親族らが幕を引きました。

後の世代が銅像を再評価し、民間主導で移転を実現するのは極めてまれなことです。実行委の顧問に就いた小樽運河を守る会の元会長、峰山富美は「防波堤と運河を造られた廣井先生、伊藤先生の思いを、今に、そして次代に伝えたいと思う心は運河保存運動の心そのものである」と語っています。この移転運動に自らの経験と同じ熱量を感じ取ったのかもしれない。

### 嵯峨久 株の配当金を原資に

1世紀前、釧路はマグロで活況を呈していました。漁の近代化を図るため、嵯峨久は1914年、釧路では先駆けとなる、エンジンで動く発動機船を建造します。その後、導入者が相次ぎ、1920年には釧路発動機漁船組合（現釧路機船漁業協同組合）が発足、嵯峨は組合長となります。

1925年には仲買人中心だった市場を生産者主導にしようと、同組合が株式会社共同魚菜市场を設立、社長には旗振り役だった嵯峨が就任しました。最盛期の1928年から1931年は、マグロの水揚げ額が水産物全体の4割以上を占め、嵯峨は「大将」と呼ばれる存在でした。

その指導力を称える漁業者たちが銅像建立の声を上げ、釧路発動機漁船組合は1928年10月の総会で建設を

正式決定します。資金は共同魚菜市場の持ち株配当金、1928、29年度分計1万5千円余りを当てることにしました。

しかし、その後の調査で経費が2万5千円まで膨らむことが判明、不足分は寄付などで賄うことにします。最終的にかかった費用は1万9,800円でしたが、いずれにしてもその大半を配当金で調達するというマグロ景気がなせる業でした。

建設委員長となった同組合理事で市議の板倉千次郎は「鮪漁のみで本年度百五十万円近くに達するに至ったのも全く嵯峨君の努力の賜で釧路水産業で最も進歩的であると共に其功労者である」（釧路新聞1928年11月30日）と述べています。

制作したのは富山県立工芸学校（現富山県立高岡工芸高校）教諭の松村秀太郎。1929年7月には釧路を訪れ、構想を固めました。

完成した銅像が貨物専用の浜釧路駅（現在の幸町公園付近）に到着したのは1930年10月19日。搬送する27日は、結集した若い漁師たちが木遣りを歌いながら、銅像を載せた台車を紅白に編んだ縄で引っ張り、急な富士見坂の上にある建設予定地の公会堂前（現生涯学習センター駐車場）まで運び上げました。



釧路漁業の父、嵯峨久の立像

11月5日の除幕式は、漁船が沖止めされ、五段雷の花火が鳴り響く盛大なものでした。板倉が挙手を宣言し、嵯峨の孫娘が幕を引くと、右手に双眼鏡を掲げながら海を見つめる背広姿の像が現れました。

銅像は本人が他界するか、要職を退いてから建設するのが一般的ですが、嵯峨はまだ現役で、漁港建設という大仕事を抱えていました。釧路発動機漁船組合員が株主となり1928年、釧路漁港株式会社を設立。代表となった嵯峨は資金繰りに奔走し、かなりの私財を投じたといわれています。10年の歳月を費やし完成した港は、嵯峨の努力に敬意を表し、しばらく「嵯峨漁港」（現副港）と呼ばれていました。

しかし、残念なことに戦況が悪化し、銅像は金属供出で撤去。漁港は1945年7月の釧路空襲で施設の大半が破壊されました。

銅像再建の話が持ち上がったのは、嵯峨が1960年8月、84歳で亡くなってから。中心となり取り組んだのは釧路機船漁業協同組合と釧路魚卸売市場でした。建設費は150万円。

制作は最初に手掛けた松村に依頼し、同じ像が復元されました。設置場所は、かつてあった所から道路を挟んで向かい側の南大通2丁目に変更。除幕式は1961年8月27日に行われ、大漁旗で華やかに飾られた会場で孫娘が幕を引くと、五段雷の花火が響き渡りました。

「マグロの釧路か、釧路のマグロか」といわれるほど、マチを潤したマグロ漁。黄金時代が去って久しい今日、嵯峨の銅像は当時を象徴する貴重な存在となっています。

### 五十嵐億太郎 精力注いだ信金理事長

留萌と増毛との間で築港の誘致合戦が繰り広げられていた中、水産業を営んでいた五十嵐億太郎は1907年、内務大臣原敬を留萌に招き、留萌の地理的優位性を説明しました。その結果、1910年に留萌築港が決定します。さらに港と留萌駅を結ぶため中央財界の出資を求め、1929年には留萌鉄道棧橋株式会社を創立しました。

億太郎の功績をたたえる<sup>しょうとくひ</sup>頌徳碑は1953年、留萌市の見晴公園に建てられましたが、月日がたつにつれ億太郎の名前も碑の存在も市民の記憶から薄れていきました。

碑の建立から30年。偉業を次の世代にもっと伝えようと留萌商工会議所は1983年3月、億太郎の立像建設を決議します。場所は標高180<sup>メートル</sup>の千望台。同会議所の地域開発委員会（古川数登委員長）が推進役となり、銅像建設と周辺整備を市に申し入れました。

これを受け、市は道路舗装や駐車場の改良などを1983年度中にも始める計画でしたが、行政側の対応が遅れ、1984年度実現へズレ込みます。

一方で、銅像本体の準備は着々と進み、1984年4月に開かれた五十嵐億太郎翁立像建設期成会の設立発起人会では、すでにデザインが3種類出来あがっており、発注後4カ月で完成することが報告されました。

5月には期成会が発足、会長には市長の原田栄一、副会長には商工会議所、漁協、農協などのトップが就任、官民挙げての協力態勢を取ります。銅像制作に熱心な商工会議所の古川は建設委員長に就きました。

古川がどれほど情熱を注いでいたか、寄付行為をみるとよく分かります。自らが理事長を務める留萌信用金庫は期成会が設立する以前に、建設資金として600万円を市に納めていました。最終的には4千万円を超

える寄付が集まりましたが、この額は寄付者の中で最高額となりました。

銅像を制作したのは山名常人。像は億太郎34歳当時の姿で、和服を着て、右手でこぶしをつくり、左手には書状を握りしめています。原敬を留萌に招き、留萌港築港の必要性を訴える様子を再現しました。

立像の高さは3.6<sup>メートル</sup>、台座を含めると6.6<sup>メートル</sup>にもなります。製作費は3,800万円。像の隣には、見晴公園にあった頌徳碑を移設しました。

1984年10月9日の除幕式は、秋晴れの好天。億太郎の長男の妻とおいが幕を引くと、右斜め前方の留萌港を眺める億太郎が丘の上によみがえりました。

古川は式典で経過報告に立ち、山名が期成会の難しい要望に応えたばかりでなく「気品、風格をも兼ね備える誠に素晴らしい立像を制作してくださった」とたたえました。

その古川は翌年、「語り継がれる郷土 留萌地方'85」（留萌新聞社編）で次のように称賛されます。

「人一倍郷土愛に燃え『報恩感謝』の念篤く、(昭和)五十九年には『留萌港湾建設の大功労者・五十嵐億太郎翁』の立像建設を提唱、広く市民に呼び掛け建設期成会を発足。四千万円以上の浄財を集め、自ら建設委員長となって同年十月七日（正しくは九日）、千望台に熱願の『大立像』を完成させた。地域開発委における活動といい、この立像といい、古川さんならではの業であり、たやすく出来ることではない」。

（敬称略、肩書は当時のもの）

#### <参考文献>

- ・ 廣井勇・伊藤長右衛門両先生胸像帰還実行委員会編「小樽港民 廣井勇・伊藤長右衛門両先生胸像帰還報告書」廣井勇・伊藤長右衛門両先生胸像帰還実行委員会、1999年
- ・ 釧路機船漁業協同組合史編さん委員会編「釧路機船漁業協同組合史」釧路機船漁業協同組合、1983年
- ・ 五十嵐億太郎翁立像建設期成会事務局編「五十嵐億太郎翁立像建設記念」五十嵐億太郎翁立像建設期成会、1984年



留萌港開発の父、五十嵐億太郎の立像